

---

# 海外研修 ― 中国雲南省昆明市の大学との交流

堀じゅん子 森 雅人 山下成治

島名 毅 山田政樹

## 要旨

本稿は2019年度、札幌大谷大学キャリア支援プログラム、海外研修(中国)として催行された、雲南省昆明市の大学との交流の記録である。中国を含む東アジア諸地域との関係が重要度を増している中、一般にこの地域への関心や理解は未だ充分とは言えない。異文化を理解し、情報を偏りなく認識するためには、現地を訪れ、人々と触れ合っこそ見えてくるものがある。今回の訪問地昆明は、中国が国家を挙げて取り組む新型都市化政策による地方拠点都市の一つであり、「一体一路」の交通ハブとして、急速に拡大している大都市である。一方歴史上の国家滇国の中心地として悠久の歴史を持つとともに、少数民族の多元的な伝統文化が息づく雲南省の省都でもある。中国最南西端の雲南省と、日本最北端の北海道には共通する課題や特長もある。本稿では、今回の交流によって得られた研修成果をもとに、今後の学術・文化・芸術における交流の展開可能性について検討する。

キーワード：海外研修、芸術文化交流、雲南省昆明市

## 1. はじめに

本稿は、2019年11月、札幌大谷大学の学生・教員による訪中団が、海外研修として中国雲南省を訪れ、省都昆明市の大学と交流した際の記録である。

グローバル化が進む世界の今後を担う学生たちにとって、海外経験や異文化理解の必要性は増している。とくに経済発展が進み、急速に変化する東アジア諸国との間で、多くの摩擦や偏見を克服しながら関係を築いていく努力としては、情報を偏りなく読み取り、他者の歴史・文化や互いの立ち位置を理解して、新しい時代を築いていくことのできる人材育成のための教育が急務である。

中国では現在、情報通信やテクノロジー分野が急速な発展を遂げ、人々の日常生活を変えている。また広大な国土に点在する地方拠点都市の開発と拡大政策が国家主導のもとで進んでおり、今回訪れた昆明市もその一つである<sup>1</sup>。さらに高等教育就学者数は90年代以降激増しており、教育機関の増設や教育内容の拡充が急ピッチで進められてきた<sup>2</sup>。そうした中国国内の状況から、世界各国に海外旅行に出かける人々も急増し、日本を訪れる中国人観光客も大幅に増えてきた<sup>3</sup>。しかしながらこの中国の変化に対する一般の日本人の認識はいま一つ立ち遅れがちであり、広大な中国各地の歴史・文化への関心や知識もいまだ十分とはいえない。

とくに北海道は人気の観光地となっていることもあり、中国人観光客に接する機会も過去とは比較にならないほど増えてきた。本学地域連携センターでは、2017年から北海道庁が推進するグリーン・ツーリズム「農たび・北海道」のPRデザインや体験実習などを連携事業として行ってきた<sup>4</sup>。道内で農泊によ

る旅行客の受け入れに取り組む諸地域では、海外旅行客の受け入れに熱心な団体・企業も少なくない。グリーン・ツーリズム、アグリ・ツーリズムへの関心は現在欧州をはじめとする世界的な動向だが、中国でも近年「農家楽<sup>5</sup>」と呼ぶ、田舎での食や生活を楽しむ旅行が盛んである。

現在中国では諸地域の伝統文化の保存・継承への取り組みが国家を挙げて行われているが、雲南省は中国国内の56民族のうち26民族に及ぶ多民族的な伝統文化を擁する土地柄であることが特色である。少数民族のサステイナブルな生活様式や伝統文化を雲南省全体の地域文化、観光資源、文化資源とする多文化共生のためのさまざまな取り組みも、省を挙げて行われている<sup>6</sup>。一方折しも北海道では民族共生象徴空間「ウポポイ」の誕生など、アイヌ民族文化の保存・継承が、新たな展開を見せてきている<sup>7</sup>。雲南省は中国西南端に位置して、かつては西南夷と呼ばれた土地であり、北海道は日本の北端の島として蝦夷地と呼ばれた土地柄である点にも共通性がある。昆明市の大学とは、「農たび・北海道」の活動とも関連しつつ、中国の他大都市とは異なる学術・芸術・文化の交流が期待できるのではないだろうか。

今回の交流は、キャリア支援プログラム海外研修(中国)として催行され、社会学部学生5名同じく教員2名及び美術学科教員2名、計9名の訪中団により、2019年11月8日～11月14日までの期間、雲南省昆明市の雲南大学滇池(ディエンチー)学院を中心に、雲南大学、雲南師範大学、雲南民族大学などとの交流を行った。

## 2. 昆明市と雲南大学滇池学院

### 2.1. 交流の発端と目的

雲南大学滇池学院との交流のきっかけは、2019年3月23日(土)・24日(日)に雲南大学で開催された「第2回中日国際日本語教育研究大会および中日言語社会文化国際学術研究会」において、以下の研究発表の機会を得たことである。

山下成治 「日本経済政策の新展開—『農旅新興』と地域文化資源との関連性—」  
森 雅人 「北海道の馬頭さん」

この研究会の立ち上げには、雲南大学で長年にわたって日本語を教授し、雲南省昆明市に所在する各大学で日本語の教育環境整備に尽力してきた田保愛明氏の存在が大きい。田保氏は、中国人学生による日本語成果発表の場である「歌と朗読の会」を創設した一人であり、雲南省の各大学で日本語を専攻する教員・学生の橋渡しの役目を果たしてきた。田保氏と本学2名の教員とは、北海学園大学の中川かず子氏(日本語教育)や田中綾氏(日本文学)を介して相識の関係を築くことになり、これ以降は田保氏をはじめ研究会に参加した中国人研究者の協力を得て、雲南大学滇池学院との交流が実現の運びとなった。

日中芸術交流の意見交換の席上、雲南大学滇池学院の馬学院長からは、2+2(母校で2年間就学の後に日本で2年間留学)の留学生受け入れについて本学への期待が表明された。周知のように留学生受け入れのためには、高い日本語の運用能力が必要であり、少なくともN2以上を満たすことが必要である。この条件をクリアするためには、本学独自に日本語の教育プログラムを構築することが望ましいが、N2の要件となっている新聞の社説や評論を理解できるレベルまで日本語能力を高めるには、限られた資源を留学生に振り向ける必要がある。

その努力は惜しむべきではないと考えるが、本学の場合は留学生の日本語教育に長けた外部機関との連携が現実的な選択となろう。言うまでもなく、定員充足率を上げるため、日本語能力に欠ける留学生

を受け入れることがあってはならない。何より信頼関係に基づいた連携が条件である。

幸いにして、札幌大谷大学訪中団の橋渡し役となっていた北海道北海学園大学教授の中川かず子氏は、日本語教育の第一人者であり、長年にわたって北海道内の外国人技能実習生の日本語学習環境の研究を行ってきた。中川氏は、2020年3月をもって北海学園大学を定年退官するが、その後も札幌市内の専門学校で留学生に対して日本語教育を行う。本学が中国からの留学生を受け入れるために、最も有望な連携先である。

「雲南は中華人民共和国の南西端に位置する省の一つで、南部はベトナムやラオスに国境を接しています。25の少数民族が暮らす多種多様に富んだ地域であることから、かねてより日本の研究者の関心も高く、日本文化の源流地としても知られています。私たち札幌大谷大学訪中団(教員4名・学生5名)が赴いたのは、雲南省昆明市にある雲南大学滇池学院という学生数2万1千人規模の独立大学です。中国の独立大学は日本の私立大学に近いと言われていますが、滇池学院の場合、その名が示すように国立大学の雲南大学が資金の一部を拠出して設立した大学です。

訪中の目的は、本学との芸術交流に意欲的な滇池学院との間で、互いの教育研究内容を紹介するとともに、様々な交流プログラムを試行する中で、どのような事業が可能なのか具体的方策を探ることです。滇池学院芸術学院からは少数民族アートや水墨画といった個性的な教育活動を紹介していただき、大いに感銘を受けると同時に、本学が推進しているグリーン・ツーリズム事業「農たび」との連携可能性も高いと実感しました。

この他に、私たち訪中団が参加した交流プログラムには二つあって、その一つは雲南省の大学で日本語を学んでいる中国人学生の成果発表会「歌と朗読の会」です。驚いたのは中国人学生の日本語運用能力の高さです。聞けば、子どもの頃から日本のアニメーションに親しんできたとのこと。訪中団の学生も着物姿で「北海盆唄」の由緒と踊りを披露しましたが、日本人の学生が発表する珍しさもあってか、大勢の中国人学生が盆踊りの輪に加わり、会場内は熱気に包まれました。

二つ目の交流プログラムは、昆明市の藤沢交誼館で行われた「日中学術交流会」です。ここでは日中双方の教員と学生が日頃の研究成果を発表しました。印象に残っているのは中国の大学院生が発表した江戸時代の日本の思想家に関する研究で、私たちでも知らないことを突き詰めて研究しており、本学の学生たちもかなり刺激を受けたようです。」

(森雅人[本学広報誌：マイトリー 90号より])

## 2.2. 発展する地方都市昆明

雲南省は中華人民共和国の南西部にあって、ミャンマー、ラオス、ベトナムと国境を接しており、西はチベット自治区と境界を接している。省とは言っても面積は394,100 km<sup>2</sup>と、日本(377,900 km<sup>2</sup>)よりも広い。観光の目的地として日本人には馴染みが薄いですが、中国国内観光では最も人気のある場所の一つである。

その省都昆明市は、1400年の歴史を有する国家歴史文化名城<sup>8</sup>として指定されており、滇池という琵琶湖の半分ほどの広さの湖を中心に発展してきた。東南アジアに近い緯度でありながら、標高1,900 mの高地に位置するため、年間を通して「春のような気候」と言われ、「春城」あるいは「花都」とも呼ばれている。

中国は省の下に市、市の下に県が属する日本とは異なる行政区分が行われており、市とは言っても面積は21,501 km<sup>2</sup>と、札幌市の14倍ほどである。現在昆明市は、中央政府の政策によって急速に発展中

で、居住人口は700万人に迫ろうとしている<sup>9</sup>。そのうち漢民族の他、少数民族は25民族96万人住んでおり、これらの人々が総人口の13.7%を占める。

現在中国本土では「新型城鎮化(新型都市化)政策」によって全国的な都市配置が見直されているところで、中小都市の発展や農村都市化など多面的な都市計画が図られている。雲南省周辺は古くからの茶の産地で、「茶葉古道」がチベット、インドなどへ茶を運ぶルートとして発達し、歴史的に民族の十字路ともなってきた。省都昆明は、東南アジア・南アジアを結ぶ交通・物流ハブとしての役割を担い、「一带一路(陸と海のシルクロード)」の結節点として重要視されて、新幹線や高速道路の開通など、国家主導による大規模な開発が急速に進められているのである<sup>10</sup>。

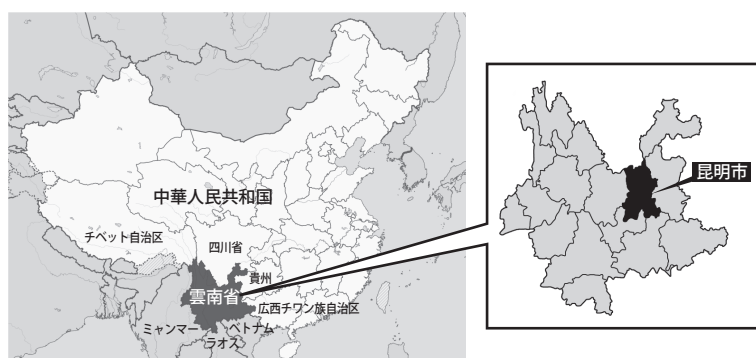


図1 雲南省昆明市

### 2.3. 独立学院としての雲南大学滇池学院

今回の交流の受け入れ先となった雲南大学滇池学院は、中華人民共和国が指定する112の国家重点大学の一つ、雲南大学の中に、2001年に創設され、民間資本を入れて2010年雲南大学から独立した、「独立学院」である。つまり独立学院は、日本の国立大学に対して私立大学に近い位置づけとなる。母体となった雲南大学とは現在も教員の派遣など関係は深いですが、運営そのものは独立した大学で、学位も学院から授与される。主管は雲南省教育厅である<sup>11</sup>。

中国の高等教育就学率は1990年の3.4%から2014年には37.5%と急上昇した。そこで政府は民間資金を活用し、地方政府と事業体投資を入れ、各地の国公立大学傘下にこうした独立学院を設置することによって、より多くの大学進学者の受け入れを可能にしてきたのである<sup>12</sup>。このような独立学院は現在全国に265設置されており、地方の大学進学率の拡大や高等教育の地域格差の緩和に寄与している<sup>13</sup>。馬学院長によれば、チベット、黒竜江省以外にある独立学院は連盟を作って互いの交流機会を設けており、ご自身がその主席を務められているということである。

2019年11月現在、滇池学院には風光明媚な滇池湖畔のリゾートエリアに立地する「昆明滇池国家観光リゾートキャンパス」(図5)と、昆明長水空港より北側の開発区域にある「昆明楊林キャンパス」(図6)、2つのキャンパスを有している。経済・法学・体育・人文・理・工・管理・芸術の八つの分野に55専攻があり、学生数は21,000人にのぼる。雲南大学の学生数も50,000人と大規模だが、昆明市にはそのほかに数万人規模の大学が複数ある。芸術分野には美術系の絵画、設計(デザイン)ほか7専攻と、音楽、舞踏、アナウンスなどの各専攻があり、高度な人材の育成をめざして、社会連携、そして国際交流や交換留学にも力を入れている<sup>14</sup>。



図2

海外研修：中国 2019年11月8日(金)～11月14日(木)		
日程	スケジュール	宿泊地
1日目 11月8日(金)	14:00 新千歳空港発 17:15 ソウル(仁川)着 18:30 ソウル(仁川)発 22:45 昆明長水国際空港着	滇池学院ホテル
2日目 11月9日(土)	12:00～13:00 大学バスで滇池学院楊林校舎へ移動 14:00～17:30 ①「歌と朗読の会」 主催：昆明ふれあいの会 会場：滇池学院楊林校舎 発表：歌や詩の朗読など日本文化に関する内容	滇池学院ホテル
3日目 11月10日(日)	08:00～09:00 藤沢友誼館へ移動 10:00～17:00 ②「日中学生研究発表会」 主催：雲南日本語研究会 会場：藤沢友誼館 発表：日中学生・教員による研究発表会	滇池学院ホテル
4日目 11月11日(月)	10:00～12:00 ③「日中芸術交流」 主催：滇池学院 会場：滇池学院 発表：日中双方の芸術教育に関する交流 ※日中芸術系教員によるプレゼン 13:00～16:00 「雲南民族村」見学	滇池学院ホテル
5日目 11月12日(火)	09:00～11:00 ホテル移動ロストガーデンへ 11:00～12:30 地下鉄で雲南大学(呈貢校舎)へ 13:30～15:30 ④雲南大学張麗華先生の授業内での交流 主催：雲南大学 会場：雲南大学呈貢校舎 日中学生によるプレゼン，ディスカッション 15:30～17:30 地下鉄で昆明中心部に移動 20:00～21:30 《雲南印象》視察	ロストガーデン
6日目 11月13日(水)	午前中自由行動 11:00 滇池学院バスで 「雲南博物館」，「官渡古鎮」，滇池見学 23:55 昆明長水国際空港発	機内泊
7日目 11月14日(木)	05:05 ソウル(仁川)着 10:05 ソウル(仁川)発 12:45 札幌(新千歳)着	

#### 2.4.「ガッチャーミ学生団」の結成

札幌大谷大学社会学部地域社会学科の4年生1名，3年生1名，2年生3名，計5名の研修参加学生たちは，この雲南大学滇池学院を中心とした雲南省の大学との交流事業のため，出発の1カ月ほど前から学生団を結成し，担当教員の指導のもと自主的に周到な準備を進めていた。訪中学生団がまとめた帰国後の報告書<sup>15</sup>によれば，学生団の目的は，この「中国研修を通じて，海外へ行くという経験や中国社会や文化を様々な体験を通して肌で感じ，現地の学生や留学生との交流を通じてより深い理解を得て，親睦を深めること」，またもう一つには，「海外でのプレゼンという経験によって，事前準備，事中的行動，事後のまとめなどの実践的な経験を積むこと」であった。

学生達は「ガッチャーミ学生団<sup>16</sup>」と自ら名付け，出発前には7回にわたる打合せを行った。交流事業では日本の伝統文化の紹介として「盆踊り」を演じることに決め，衣装の準備，練習などを行っていた。また研究発表のための資料の作成，自己紹介や発表の練習も行った。そして出発直前の打ち合わせでは，研修直前の準備，備品の確認，必要な物の購入などを行って出発に備えた。

研修のスケジュールは次頁、図2のとおりである。次の3章ではその日程に沿って、研修と交流行事の概要について述べる。

### 3. 雲南の大学との交流—中国で日本文化に会う

#### 3.1. [2019年11月8日] 新千歳から仁川経由、昆明長水国際空港へ

一行は、新千歳空港に集合し、韓国仁川経由で昆明長水国際空港へと出発した。海外旅行が初めてという学生が多い中で、韓流ファンの学生だけが韓国旅行の経験があったが、若者にとってサブカルチャーは、ときに異文化への関心を開く「窓」、旅への入口となる。新千歳から仁川国際空港までの所要時間は3時間15分で、仁川でのトランジットの後、夕方18時30に出発、昆明長水国際空港までは4時間15分、到着した時にはすでに深夜となっていた。

昆明長水国際空港は、昆明の交通ハブとしての機能を象徴する大規模な国際空港として、2012年6月に市街中心部から東北24.5kmの場所に開港した。これに伴い、それまで南市区にあったローカル空港、昆明巫家壩国際空港は廃止された。現在の昆明長水国際空港は、中国全土に配置された最も重要な3つの国際ハブ空港、①北京首都(北方)、②上海浦東(華東)、③広州白雲(中南)に次ぐ、2つの門戸空港(ポータル空港)、④昆明(西南)、⑤ウルムチ(西北)の一つとして、全国5つの重要空港の中に位置付けられている<sup>17</sup>。空港到着後は、滇池学院の先生が空港で出迎えてくださり、学院のバスで空港高速道路を市内へと向かった。

昆明での宿泊先は、昆明滇池国家観光リゾートキャンパス内の、図書館の近くにあった。立派なフロントロビーもあり、客室数も多い通常のホテルだが、学院には管理学院(School of Management)の中に観光専攻があって、学生たちの研修施設としても機能している。フロントに座っているのも学生で、運営は学生たちが中心となって行っていると聞いた。もとは学生寮だったものをホテルとして改造したものだという。客室も広く快適だった。(図3, 4, 5)

チェックイン後はすでに深夜で日付も変わっており、夜食は出迎えの先生と研修期間中世話してくれることになる日本語学科の学生2名とともに、キャンパスそばの庶民的な街に出かけて、その一画にある串焼き屋に入った。焼き鳥のように串に刺したありとあらゆる食材を炭火で焼いてくれる当地ならではの屋台だった。この詳細については本稿の「食文化」のセクション(4.3)で後述する。中国側の先生はもちろん、学生たちも日本語が非常に流暢で、コミュニケーションに全く支障なく、日中の学生たちはすぐに打ち解けた様子だった。



図3 滇池学院ホテルロビー



図4 滇池学院図書館



図5 滇池学院昆明滇池国家観光リゾートキャンパス



図6 滇池学院昆明杨林キャンパス

### 3.2. [2019年11月9日] 第7回「歌と朗読の会」—滇池学院杨林キャンパス

翌朝は一同キャンパス内の学食に出かけ、昼、午後から開催されることになっている「歌と朗読の会」に参加するため、再び学院バスで、昨夜到着した長水国際空港の更に北側に位置する滇池学院昆明杨林キャンパスへと移動した。この日は、前日出迎えてくれた学生2名と、日本語学科の女性の先生が同乗してくれた。彼女は日本人だが、結婚して中国籍を取り昆明に移住してからまだ日が浅く、キャンパス内のホテルの隣の職員寮に住んでいるということだった。キャンパスは一つの街のような機能が備わっており、学生も職員も学内の寮で生活しているということである。

杨林に向かうバスの車窓からは、高層住宅の建築が進む昆明の街並みが見えた。日中交流「歌と朗読の会」が行われる杨林キャンパスの报告厅は、急ピッチな開発で赤土が剥き出した斜面の上にあった(図6)。着物を着こなした学生たちが出迎えに出ていたが、日本人ではなく、当地で日本語を学ぶ中国大学生達である。报告厅には大きなスクリーンとステージのある大ホールがあった。「歌と朗読の会」は、日本語による発表の場と中日文化交流の促進のために、雲南省の各大学の日本語を学ぶ学生たちが集まり、ステージ上で歌舞や日本語の朗読などを披露する催しで、今回で7回目となる。(主催:「昆明ふれあいの場」、共催:雲南大学滇池学院、後援:雲南日本語研究会、協賛:雲南犖巧文化传媒有限公司、新世界教育グループ・桜日本語<sup>18)</sup>)。今回の発表者は、雲南大学滇池学院、旅游職業学院、雲南民族大学、雲南師範大学、雲南師範大学文理学院、雲南日本語補習授業校、そして日本からは札幌大谷大学、それぞれの大学の学生達である。

代表あいさつの後、学生たちの演技が始まった。

学生たちが選んだ演目は、ONE PIECEの「ビンクス酒」、 「夢をかなえてドラえもん」、東京ゲゲゲイの「ゲゲゲイの鬼太郎<sup>19)</sup>」、合唱「花」などのアニメソングやJ-POPの歌とダンス、日本語の物語や散文の朗読のほか、大スクリーンの映像に合わせて日本でも放送中の中国ドラマ、「瓔珞(エイラク)紫禁城に燃ゆる逆襲の王妃」の映像に合わせて行った日本語アフレコは見事だった。また、「ソーラン節」を現代的にアレンジした群舞も見ごたえ十分だった。

ガッチャーミ学生団は、甚平・浴衣姿に団扇を持って登場し、北海道の夏祭りにおける習俗というテーマでの発表と、盆踊り(「北海盆歌」、「子供盆踊り」)を披露した。学生たちの声掛けに、会場から多くの人たちがステージ上に上がり、日中の学生たちと一緒に踊った。(図7)

それぞれ良く準備・練習された演目と、司会者はじめ、出演学生たちの日本語力には驚かされた。グレートファイアーウォール<sup>20)</sup>の名で知られる中国国内のインターネット検閲システムによって、海外からの情報は限られているものと想像していたが、日本のアニメやマンガがきっかけで日本語を学ぶ道を





図7 歌と朗読の会 ガッチャーミ学生団による発表



図8 歌と朗読の会 表彰式

選ぶ若者は、ここ中国でも多い。例えば「ゲゲゲイの鬼太郎」は、アニメ「ゲゲゲの鬼太郎」の主題歌をアレンジしたもののだが、衣装はゴシック風で、振り付けはYouTube上でしか目に触れる機会が少なく、この歌とダンスは、我々一行の誰一人知らなかったものだ。また、合唱「花」ではセーラー服の女子学生の一団が登場したが、ネットでいわゆるコスプレ用の衣装を購入したもののようだった。アニメ、J-POP、コスプレなどのリアルタイムの日本文化が、中国の若者たちにこれほど浸透していることは意外でもあった。

最後の表彰式もなごやかに終わり、終了後の夕食は雲南大学、滇池学院の先生方と、本学の学生教員とで、辛くて美味しい雲南料理を囲んだ。

### 3.3. [2019年11月10日] 第1回 日中学生学術交流会—藤沢友誼館にて

翌日は市内中心部、环城东路にある藤沢友誼館で行われるこの日の催し、「日中学生学術交流会」に向かった。昆明市は神奈川県藤沢市と友好都市関係を締結しており、藤沢市の資金提供を受けて建設されたのがこの藤沢友誼館である。ここでは、日中文化交流の場としてしばしば美術・文化・日本語教育等の交流事業が行われている。瀟洒な外観に、壁には書画の掛かる、東洋文化の香り高い施設である(図9)。

雲南日本語研究会主催による、第1回「日中学生学術交流会」では、中国側からは学生と院生、日本側からは学生と教員が研究発表を行った。中国側の学生は、すべて日本語による発表で、分野は文化論、言語学、通訳は全く不要だった。日本文化に関する研究では江戸期の貝原益軒の思想をジェンダー視点から取り上げた研究、少数民族の文化研究では雲南省周辺に分布するタイ族に関する発表、洪水神話に関する研究、また言語学では日本語の文法的分析や、マルチモーダル・ディスコース理論の日本語教育への応用の提言と、いずれも興味深い研究、高度な研究発表がすべて日本語で行われ、当地での日本語教育のレベルの高さを感じた。

とくに少数民族に関する雲南省ならではの研究として、タイ族文化に関する発表では、発表者自身タイ族の出身であり、そのことを以前は隠していたが、現在は誇りを持って研究しているとの言及があり、世界の諸地域に共通する多文化共生の在り方への課題と雲南省でのその取り組みに関心が湧いた。また、洪水神話の研究では、日本神話、ギリシャ神話、旧約聖書、北欧神話などにも見られる洪水神話の類型と、雲南省等の複数の少数民族に伝わる洪水神話の特徴との比較が興味深かった。

日本側の学生は、学生団長が代表して「地方旅客の目的別交通動態調査—札幌大谷大学生による個人旅行分析」と題して、北海道内の旅行者の観光行動に関する分析と、「農たび・北海道」など道内を対象に





図9 藤沢友誼館 日中学生学術交流会



図10 学生団長による発表

した日頃の研究活動に関する発表を行った(図10)。また、日本側教員は、美術学科から中国版画の江戸浮世絵への影響について「江戸浮世絵に見る遠近法の東西」、地域社会学科からは、グローバル人材のマネジメントに関する研究として「国際人的資源管理について」、また民俗学的研究として「日本の獅子舞と北海道への普及」と題しての発表を行った。

今回の「日中学生学術交流会」は第1回目の試みであったが、中国人学生にとっては日本語での発表機会となり、他方日本人学生は中国側学生の研究レベルに刺激を受けた様子で、異文化間の相互理解を深める意味でも両者にとって貴重な機会となった。

午前10時から午後5時までまる1日続いた学術交流会が短く感じられ、終了後は藤沢友誼館そばで夕食を撮ったのち、市内を走る二階建てバスに乗ってホテルに戻った。

### 第1回 中日学生学術交流会プログラム

主催 雲南日本語研究会

2019年11月10日(日) 10時~17時 於藤沢友誼館

雲南日本語研究会元会長現顧問 範広融 開会の挨拶

1. 雲南師範大学 李越「江戸女子教育に見る儒教思想—貝原益軒の所説を中心に」
2. 札幌大谷大学 堀じゅん子「江戸浮世絵に見る遠近法の東西」
3. 雲南師範大学 劉杏「授受動詞についての考察—視点制約を中心に」
4. 札幌大谷大学 富樫慧凜央「地方旅客の目的別交通動態調査—札幌大谷大学生による個人旅行分析」
5. 雲南大学 李庭宇「中国、タイにおけるタイ族文化の対照研究」
6. 雲南師範大学 徐秀嬌「マルチモーダル・ディスコース理論に基づく日本語教育応用研究の現状分析」
7. 札幌大谷大学 山田政樹「国際人的資源管理について」
8. 雲南大学 胡小双「雲南少数民族の洪水神話と兄妹婚」
9. 札幌大谷大学 森雅人「日本の獅子舞と北海道への普及」

雲南日本語研究会会長 張麗花 閉会の挨拶

司会者：雲南大学滇池学院 譚盈盈

札幌大谷大学 富樫慧凜央

### 3.4. [2019年11月11日] 中日芸術交流と雲南民族村

#### 3.4.1. 滇池学院での「中日芸術交流」

滞在3日目は滇池学院リゾートキャンパス内でまず芸術学部を訪問し、次いで会議室で滇池学院と札幌大谷大学双方の概要についての紹介を行った。

滇池学院芸術学院は、芸術設計(芸術デザイン)系、音楽表演系、2つの学部を擁している。この日は美術学科の教室でまず学生・教員の作品の紹介を受け、その後のワークショップに参加した。教室には水墨画などの絵画、陶芸、皮革、その他のクラフト、そして民族衣装をアレンジした服飾作品など、中国・雲南省ならではの伝統美術を活かした作品も多く、各担当教員からの説明を受けながら興味深く見学した(図11、図12)。

現在中国では全国的に、各地域に伝わる伝統文化復興の動きが盛んである。各地に残る少数民族の特色ある文化も、伝統文化として再び見直され、新たに産業化・ビジネス化する動きがある。デザイン系ではそうしたニーズにも応えながら、伝統文化の新たな展開を模索する教育が行われている。

このことは、例えば北海道のアイヌ文化を例にとってみれば、まずは博物館等による文化財としての保存、次に伝統文化の保護・継承から、現在ではそこに留まらず、2020年春白老町に開館予定のウポポイ(民族共生象徴空間)に象徴されるように<sup>2)</sup>、アイヌ文化全体を今日の生活に活かしてゆく方向で、アイヌ民族自身が創造的活動を行いつつ、民族の共生に向かう動きへと変化してきていることと共通点がある。こうした方向からも、雲南省と北海道の間に今後の研究交流の意義が見いだせるのではないだろうか。

その後同キャンパス内の会議室に移動し、滇池学院馬学院長から大学の沿革、概要等の紹介を受け、次に、相互の大学の芸術学部教員代表が双方の教育内容の紹介を行った(図14)。滇池学院芸術学院からは、専攻と施設についての説明がなされ、中国国内をはじめ海外のコンペティションにも参加し、表彰されていることが紹介された。本学からは札幌大谷大学芸術学部美術学科の学びの体系について、主な特徴について写真を交えて紹介するとともに、日本における美術教育のトレンドを解説し、学生作品の紹介では、教員を含め参加していた学生たちの興味をひいた様子を見てとることができた。初顔合わせということもあり、具体的な教育について語られることはなかったが、絵画をはじめとしたファインアートやファッション、デザインに関してお互いの文化と照らし合わせながら交流を行うことは、見識を広げるとともに、美術を通じたルーツを探ることに繋がるように思われる。



図11 芸術学部芸術デザイン系 服飾デザイン



図12 芸術学部でのワークショップ



図 13 滇池学院の先生方と



図 14 札幌大谷大学の紹介

雲南大学滇池学院の独立学院としての位置付けは先にも述べたが(本稿 2.3), 国公立の大学に対して私立大学に近い位置づけであり, 今後本学とは日本語, 芸術(音楽・美術), 特に少数民族の芸術や, グリーン・ツーリズムを含む観光, またデザインではブランディングなどの分野での交流の可能性が見出させた。学院長も少数民族族ハニ(哈尼)族の出身とのことで, 日本を訪問されたこともあり, 雲南省と日本の民族文化の親縁性についても言及されていた。

会談終了後は学院長を囲んで昼食の雲南料理を囲み, そろそろハニ族の新年(「十月年」)とのことで, ハニ族の「長街宴」<sup>22</sup>などの習俗についてなど, 学生たちと共に興味深くうかがった。

#### 3.4.2. 「雲南民族村」—稲作文化のルーツに触れる

午後には滇池学院から徒歩で行ける距離の「雲南民族村」に向かった。

「雲南民族村」は, 雲南省最大の淡水湖である滇池に隣接しており, 面積 89 ヘクタールの広大な敷地に雲南省の 26 の民族グループ<sup>23</sup> の伝統的な文化・生活を展示する体験型の施設である。民族村は, 「国家民族委員会が指定した民族文化基地として, 民俗文化を伝承・継承する場であるだけでなく, 観光客が各民族の伝統文化に関心を持ち鑑賞することを経済効果につなげようとしている。民族村に展示する住居や生態及び民族文化は, できるだけ原住民やその文化形態に近い形で再現し, 各民族の文化遺産, 特に無形文化遺産の保全と保護, 継承と展示を基本原則としている」<sup>24</sup>。

正面の堂々たる牌楼門をくぐると, 広大な敷地内に民族ごとのエリアが実際の村のように配置され, 伝統的住居による村落とそこでの生活が再現されている。生活空間の中に民具や衣装も展示されており, それぞれ特色あるカラフルな民族衣装を着た若い男女のスタッフによるガイドや体験指導で, 住文化・食文化, 伝統楽器による音楽, 祭などの習俗の片鱗を伺うことができる<sup>25</sup>。儀式やショーのためのイベント広場も各所に設けられており, 折々上演される。

とても半日で廻ることのできる広さではなかったが, いくつかの民族エリアを見ることができた。滇池学院の学院長の出身ということもあり, ハニ族の村には特に親近感を覚えた。確かに高床式の住居, 茅葺き屋根に水車, 果樹の間に鶏が遊ぶ庭など, 稲作地帯である日本の伝統的な村落との類縁性がここに感じられる。囲炉裏端に民族衣装の男女が座り, 日本の学生たちが歌うドラえものの歌に合わせて伝統楽器の太鼓を叩いてくれた(図 15)。稲はここ雲南からラオス, タイ, ビルマ周辺に広がる山岳地帯で生まれたと考えられており<sup>26</sup>, ハニ族が 1,000 年以上をかけて作り上げ, 営んできたとされる雲南省元陽の棚田は, 2013 年世界文化遺産に登録されている。戸外では折しもハニ族の田植えのショーが始まり, 水の張られた棚田に苗の束を植えてゆく様子は日本の田植えによく似ていた(図 16)。





図 15 雲南民族村：ハニ(哈尼)族の家屋



図 16 雲南民族村：ハニ族による田植えのショー

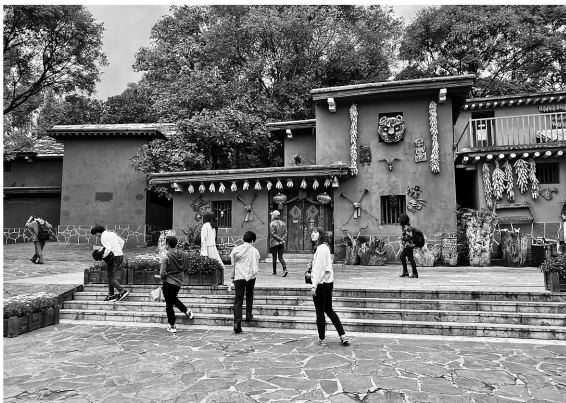


図 17 雲南民族村：イ(彝)族の村



図 18 雲南民族村：ペー(白族)のエリア

ハニ族のエリアを出てさらに奥へと進むとイ(彝)族の村と広場(図 17)、そして最も奥にペー(白)族の街並みがあった(図 18)。ペー族エリアの街並みは、白壁にグレーの瓦屋根で、壁にはそこそこに絵が描かれている。ペー族の中心地は大理で、その名の通り大理石と銀を産し、稲作・畑作のほか、チベット・ミャンマーに通じる交通の要衝として、商業で栄えた都市の雰囲気が再現されており、石畳の道の左右に銀細工や茶などを売る土産物の店がならんでいた。

雲南民族村は、いわゆる観光客向けにショーアップされたアミューズメントパークでもある。我々がここで垣間見ることができるのは、現実には変化し続けている少数民族の生活の、固定化され、理想化されたレプリカとしての表象に過ぎないかもしれない。中国では、対外開放政策の実施以降、観光が急速な展開をとげてきており、文化産業・観光産業として民族文化の積極的な資源化が進んでいる。例えば文化遺産に指定されたハニ族の棚田の景観についても、また、1997 年末に世界遺産として登録された、ナシ族、漢族、白族、彝族、チベット族といった各民族が現実的に生活する麗江古城の歴史的都市景観についても、「文化的景観のみが保護の対象となり、生活は変わっていく<sup>27)</sup>」。また、再建された伝統的な街並みの書割化も指摘されている<sup>28)</sup> ところであり、都市化は山間に住む少数民族の伝統的な生活様式にも変化と影響をもたらさずにはいない。民族の伝統と現実の生活との乖離も起きつつある。しかしながら雲南省は民族村については、少数民族の社会と文化的慣習を映し出す「窓」と位置づけており、より生活実態を活かした取り組みも試みられている。文化遺産の継承とその観光活用については、現在北海道の



アイヌ文化が先住民自身の手による再建，継承，再創造を模索しつつあることともシンクロナイズする課題として今後も関心を向けていきたい。

### 3.5. [2019年11月13日] 雲南大学での交流授業と《雲南映像》

#### 3.5.1. 雲南大学呈貢キャンパスでの交流授業

昆明での研修は早くも5日目となり，この日の朝は，滞在していた滇池学院内のホテルをチェックアウトして，当日の日の宿となる，滇池の北，市内中心部に位置する翠湖畔そばのゲストハウス，「ロストシティ」に移動した。

この日は雲南民族大学の先生と滇池学院日本語学科の先生，お二人の同行で，都心の五一路駅(図19)から地下鉄3号線に乗って昆明市郊外にある雲南大学キャンパスへと向かった。地下鉄は駅も車体も新しく快適で，社内の治安も良い印象を受けた。改札の前では手荷物のX線検査が行われているが，2014年昆明駅で発生したテロ事件を受けての対策でもあるのだろう。良く晴れた日で，地上に出た電車の車窓からは，高層マンションの建築ラッシュが進む郊外の風景が見えた。3号線を途中の春融街駅で乗り換えて昆明南駅まで行けば，2016年に開通した高速鉄道が走っている。我々は乗り換えなしで終点前の大学城駅まで行って下車した。駅前のショッピングセンターで昼食をとった後で，路線バスに乗り継いだ。バスは広大なキャンパスの中まで入っていく。この日は雲南大学日本語学科の教室を訪問することになっていた。

雲南大学のある呈貢新区は，2020年を目標とする昆明市のマスタープランに基づいて，滇池東岸に大規模なニュータウンとして建設が進んできた(図20)。雲南大学のある雨花片区は「大学城」の別名を持ち，雲南大学はじめ，雲南民族大学，雲南師範大学，昆明医科大学，昆明理工大学など9つの高等教育機関が移設されて，大規模な学園都市が建設されている。将来的には35万人の学生が住む計画で，教職員用の住宅団地も置かれている。また大学城南の片区(地区)には「昆明呈貢情報産業団地」があり，アジア全域に向けた情報産業の拠点化をめざしている。市政府のある吳家營片区には，前述した高速鉄道の昆明南駅がある<sup>29</sup>。

雲南大学は緑の多い広大なキャンパスにそれぞれの校舎が十分な余裕をもって建てられていた。教室に入ると，日本語学科の学生たちが「Country Road」を日本語で合唱して出迎えてくれた。授業では雲南大学と，札幌大谷大学の学生同士のディスカッションが行われ，普段の生活のこと，サークル活動のこと，好きな芸能人や今日本で注目の中国コスメについてなど，気の置けない学生同士の話しが弾んだ(図21)。また日本人学生の「家では1日何時間くらい勉強しますか?」という質問に対して，中国側の学生



図19 地下鉄五一路駅



図20 雲南大学呈貢キャンパス



図 21 雲南大学日本語学科での交流



図 22 雲南芸術劇院《雲南映象》

は5, 6時間と答え、担当教授は「最近昆明市では日本語学科を卒業しても仕事がない。みんなあまり勉強しなくなった。それでもそんなに勉強していることを初めて知った」と感想を漏らされた。ここ昆明でも、日本企業はかつてのような存在感を相対的に失っているのかもしれない。これだけ熱心に日本語を修得し、日本に関心を持ってくれる貴重な人材に、なんとか雇用機会を開いていきたいものである。

そのあと日本側の学生は、大学での研究内容を紹介し、次いで女子学生が浴衣の着付けの披露を行い、ここでも再び中国人学生たちを交えて教室内で輪になって日本の盆踊りを踊り、楽しんだ。

最後に中国側の学生たちが、日本でも広く親しまれている《旅愁》を中国語で歌って見送ってくれた。《旅愁》はもともとアメリカの曲だが、中国では李叔同の作詞により《送別》の題で親しまれている。李は1905年に現在の東京芸術大学に留学し、西洋絵画と音楽を学んで1910年に帰国、その後《送別》を作詞して、米国よりむしろ日中両国で歌い継がれることになった。日中友好の象徴ともいえる曲である<sup>30</sup>。

帰路は再びバスと地下鉄で五一路駅まで戻った。周辺には無印良品、ユニクロの店舗もあり、新しいショッピングモールや、お洒落なレストランもある。交差点の向かい側には雲南美術館のエキゾチックな雰囲気の建物が見えた。

### 3.5.2.《雲南映象》—少数民族による芸術創造

夜は雲南民族大学教授の推奨により、雲南芸術劇院で毎日上演されている少数民族の歌舞ショー《雲南映象》を鑑賞した(図22)。初演は2003年8月で芸術総監督は雲南省大理出身の白(ペー)族ダンサー、楊麗萍(Yang Liping)、出演者の7割以上が雲南省各地の少数民族出身である。平日の夜にも関わらず、ほぼ満席の盛況だった。

冒頭はプリミティブなパワーを感じるイントロで始まり、第一場、第1部「太陽」では迫力ある「陽鼓」(佤[ワ]族の木製の太鼓)の演奏、各民族の特徴ある楽器演奏と群舞。また第2部「月亮(月)」では、満月の中に女性のシルエットが舞う幻想的なシーンが印象的だった。第二場「土地」では、それぞれの民族の習俗が、特色ある歌舞、衣装と、前衛的・象徴的な舞台装置や照明効果によって演出される。第三場「家园(家庭)」は少数民族の自然の中での生活を思わせる鳥のさえずりや動物の声。第四場「火祭」は、女性ダンサーによる熾火のように静かな舞踏から始まって、次に女神を中心とした男女の群舞により、信仰儀礼の呪術的雰囲気が表現される。第五場「朝聖(巡礼)」は、高山を旅する巡礼によって展開され、チベタンホルン、マニ車などがチベット族の表徴として用いられる。最後に「尾声(エピローグ)」は、エレガントなタイ族の孔雀の舞<sup>31</sup>「雀之灵(鳥の心)」から、にぎやかなエンディングにつながって舞台を

閉じる。《雲南印象》はエンターテインメントとしてショーアップされながらも、大自然と共に暮らす雲南諸民族のスピリットを象徴的に表現した芸術性ある舞台である<sup>32</sup>。

マイノリティーである民族の文化表象については、20世紀末から21世紀にかけて様々な議論があった。1884年から85年にかけてニューヨーク近代美術館で開催された「二十世紀芸術におけるプリミティヴィズム—部族的なものモダンなものとの親縁性」と題した展覧会をめぐるいわゆる「クリフォード・ルービン論争<sup>33</sup>」などもその代表的な例である。そこでは、例えば植民地主義時代の残滓として、近代の側を中心に置き、そこから周縁に置かれた他者としての部族社会をまなざす見方、発見され収奪され展示されることで、伝統の中に他者を封じ込める装置としての表象が問題になっていた。

《雲南印象》で楊は、自らの出身である民族の伝統文化を掘り起こし、他の民族と共にダンスグループを結成して、新たな作品を創作し演じてきた。作品には民族を取り巻く自然と直接つながった信仰や呪術のスピリットも置き去りにされてはいない。《雲南印象》の興業的な成功は、観光客にとっては山間・辺境に暮らす民族への関心を高め、一方では若い世代に民族文化の継承を促し、さらに地域と経済を支える一助となりうる可能性を示した成功事例の一つと言えるだろう。

### 3.6. [2019年11月13日] 悠久の都市昆明

#### 3.6.1. 翠湖公園から雲南美術館散策

海外研修最終日は昆明市内観光に充てられていた。

宿泊先のゲストハウスは、市内中心部に位置する翠湖畔の高級住宅街の中にあった。朝は集合時間まで三々五々近場の散策などができたので、早朝ホテルのすぐそばの翠湖公園に散歩に出た。翠湖は、不忍池より少し大きいくらいの面積の、湖というよりは池というほどの大きさで、蓮が水面を覆い、柳の枝が垂れて、島に渡る通路があるあたり、日本でもよく見る公園の風景に似ていた。やはり同じ文化圏にいることを感じる。冬、大陸の北の方からこの地にやってくるというカモメが池の上を飛び回っていた。湖畔の碑に刻まれた碑文「翠湖春曉」は、二胡や琵琶で演奏される、この土地の代表的な楽曲である。(図23)

その後、翠湖から五一路沿いに10分ほど歩いて、昨日見た雲南美術館に行ってみた。タイなど東南アジアをイメージさせるデザインの建物である。ここは2014年までは、午後から訪ねることになっている雲南省博物館だったところで、博物館は官渡地区に移転して、こちらは今、雲南美術館となっている。美術館はあいにく準備中とのことで閉館していたのだが、警備員に許可を得て入れてもらった。館内では会期が終了したばかりの中国建国70周年記念「高原雪山画派作品展」の出品作品が梱包作業に入る前で、壁から降ろされ状態の絵を一部見る事ができた。雲南省、四川省、青海省、チベット自治区、新疆ウイグル自治区などの美術家協会が共催した、高山聖域をテーマとする展覧会で、各地を巡回してきたところだった。中国の伝統的な作風に、洋画の基本やエッセンスがとり込まれ、山岳風景や自然に加えて人物を描いた作品もあり、新鮮な印象を受けた。東洋の伝統的な画法と西洋絵画とのクロスオーバーという意味では、近代日本画と相通ずるところがある。中国の現代の絵画は、日本では意外に知られていない。とくに日本画を学ぶ学生たちにとっては興味深いに違いない。(図24)

ホテルに戻る道すがら、光華街の古い街並みを覗いた。果物やひょうたんなどを売る店、大鍋を外に出して調理する食べ物屋など、この土地らしい昔ながらの店が立ち並ぶ老街である。ここは中心部のビル街に近く、再開発が進む中に、趣ある古い街並みの断片が残されていた。

一旦宿泊先に戻り、チェックアウトして、午後は再び滇池学院のバスで市内観光に出かけた。





図 23 翠湖公園



図 24 雲南美術館(展覧会撤出風景)

### 3.6.2. 雲南省博物館へ

雲南省博物館は、前述した市内中心部の雲南美術館の建物から 2015 年、滇池東岸の官渡地区に移転した。中国の公的施設はスケールが大きいので、新しい博物館は広大な敷地に建つ堂々たる建物で、正面には大鵬金翅鳥の金色の像が翼を広げていた<sup>34</sup>(図 25)。

1951 年に創設された雲南省博物館は、雲南省最大の総合博物館であり、国家一级博物館の一つに指定されている。雲南省の文化遺物の収集、展示、研究、保護のための中核機関となっており、ここでは先史時代から青銅器時代、東漢から魏晋、唐宋、元明清、そして近現代の雲南の悠久の歴史を垣間見ることができる。青銅器、陶器、書や絵画、碑文、切手、工芸品等 20 万点以上の文化遺物を収蔵しており、年間来場者数は 100 万人を超える<sup>35</sup>。

入場は無料で、中国ではこのような規模の博物館でも入館無料の博物館が増えてきている。この日の案内役を務めてくれたのは雲南民族大学博士課程の院生で、雲南省博物館での彼女の解説はたいへんありがたかった。

雲南省は中国の中では歴史的には西南夷と呼ばれた、中原から見て辺境の地域である。雲南博物館で見られるのは、民族文化の多元性ととともに、文化の歴史的多層性である。この地域では古くから滇国や大理国の文化が、昆明を中心とした滇池文化区、大理を中心とした洱海文化区を形作ってきたように、文化区域が少なくとも 5 つはあるという<sup>36</sup>。

収蔵品の中で特色があるのは、紀元前から滇池周辺に栄えた滇国の青銅器、雲南一帯に 8 世紀半ばに興った南詔国や、10 世紀から 13 世紀にかけて栄えた大理国の仏教文物、また 25 の少数民族の服装や工芸品などである。滇国はシルクロードの西南の道にある重要な宿場となり、多くの国々の商人や南北の民族がここに集まって、商業や貿易が文化交流を促した<sup>37</sup>。

滇国からの出土品でこの博物館のシンボルともなっているのが 1972 年に出土した《战国牛虎铜案(牛虎銅案)》(B.C.475～同 221, 図 26)である。これは祭祀の際に供物を載せる器具として作られたもので、牛の尻の部分に虎が噛みついていてる様を表現した意匠は、滇国の青銅器の冶金鑄造技術の高い水準を示すものである。

多くの展示物の中で目についたものに、イ族などの固有の文字で書かれた写本、拓本等があった。雲南省の少数民族は固有の言語を持つが、文字を持つ民族もおり、ナシ族のトンパ文字は日本でも著名なデザイナーが取り上げて、そのピクトグラムのような字形が話題になった。このトンパ文字だけでなく、中国の少数民族のうち 21 言語が自民族の文字を持っていた<sup>38</sup>という。しかしながらそれらの古籍の保護にはあまり力が入れられてこなかったせいもあり、それを読める人も多く世を去って、貴重な民族の





図 25 雲南省博物館《大鵬金翅鳥》(注 34 参照)



図 26 雲南省博物館《战国牛虎铜案》

古籍が誰にも解読できないものになってしまっている。

そうした民族文化の保護を訴えて、残念ながら今回訪れることはできなかったが、雲南民族村に隣接する雲南民族博物館<sup>39</sup>の館長、謝沫華氏は、先に上げた雲南文化の特徴である、①多民族多元性、②多地区・多流域性、③文化の多層性ととともに、これらの多様な要素が集まり長期にわたって交流した結果としての、④多様に融合・吸収した文化の包括性を挙げている。「世界の民族学の歴史は、閉鎖的な文化はどこにでも見られるが、開放的な文化は逆に探すことが難しいこと、文化の反発と衝突は往々にして文化の適応と融合よりも多く起こりうるということを示している。雲南文化は「跨国性」(トランスナショナル)、「跨境性」(トランスボーダー)、「跨文化性」(クロスカルチュラル)の要素を含んでいる」<sup>40</sup>と指摘する。このことは、単に地方の文化財保護の観点からだけでなく、グローバル化が進む今日の世界が直面する課題にも押し広げて考えてゆくことができるに違いない。

1980年代以降の雲南省では、文化多様性保護の分野で、幅広い取り組みが行われてきている。この雲南省博物館に加え、雲南各地で各級・各級の博物館が建設されてきており、さらに民族民俗文化村の建設、民族文化生態村<sup>41</sup>の建設などが、雲南各地で進んできている、こうした取り組みには、先進事例として今後も注目していきたい。

### 3.6.3. 「官渡古鎮」から滇池湖畔

雲南省博物館を出た後は、博物館の道路を挟んで向かい側に位置する「官渡古鎮」(図 29)を歩いた。

官渡古鎮は千年の歴史を持つ老街である。唐、宋、元、明、清王朝時代に渡る、五山、六寺、七閣、八寺等の風景と多くの重要なモニュメントが残り、現在は、修復された古い街並みに、特産物を守る土産物屋や土地ならではの軽食を売る店、レストランなどが軒を連ね、人々が行き来する人気の観光地となっていて、往時の賑わいを想わせる。

官渡古鎮は滇文化の誕生の地の一つであり、市場の街、交通の要衝として発展した。唐・宋時代には滇池東岸の船着き場のある漁村、市場の町として発達し、明・清代には、商業と手工業で栄えて、役人や商人が行き交う街に発展したという。それが「官渡」の名の由来ともなっている<sup>42</sup>。

中央の街路を抜けてわき道にそれると地元の庶民で賑わう市場に出た(図 28)。帰り道、アーケードには観光客に交じって、近郊からやってきたのかりヤカーを押す人、赤ん坊をおぶった女性、竹籠に入れた荷物を背負った高齢の女性も見かけた。10年ほど前には街中でも民族衣装の人たちをよく見たと聞く。人々の生活はかなりのスピードで都市化してきたのだろう。

帰りに牌楼門近くの店で土産に普洱茶を買った。雲南省付近は茶の原産地でもあり、宋代になると雲



図 27 官渡古鎮



図 28 古鎮新市場



図 29 滇池



図 30 滇池学院学食

南で産出された茶を吐蕃(現在のチベット)に運ぶ街道が確立されてきた。茶は馬に乗せて運ばれたため「茶馬古道」と呼ばれる<sup>43</sup>。円盤形に平たく圧縮された「茶餅」も良く知られており、これは馬に荷を乗せやすくするためだという。

昆明市は2章で述べた通り、歴史文化名城に指定された都市であるが、橋谷(2015)によれば、旅行者が昆明に持つイメージは、他の都市に比べると自然環境や自然景観、「春城」と呼ばれる気候の良さなどに偏っているという調査結果がある<sup>44</sup>。西安や成都などの都市と比較すると、歴史・文化都市としての昆明の知名度はまだ低い。昆明市はこの官渡地区を、「ショッピング・観光・レジャー・生活・祝福を統合した千年の古代都市の聖地」をテーマに保護とプロモーションを進めているのである<sup>45</sup>。

門のところには滇池学院のバスが待っていており、夕暮れ近く、旅の終わりに滇池湖畔(図 29)に立ち寄って湖を眺めてから、もう一度滇池学院キャンパスに戻り、滞在中世話してくれた雲南大学、滇池学院の先生方・学生らに再会して、学食で温かい米线を食べた後(図 30)、再び昆明長水国際空港へ向かい帰途に就いた。

### 3.7. [2019年11月13日] 仁川空港経由で帰国

昆明から深夜の便に乗り、仁川空港に着いたのは翌日の早朝だった。

新千歳までの便にかなり時間があったので、仁川空港で各々仮眠したり、シャワーを浴びたりして過ごした。快適な設備で休養を取ることができ、日本に近づいたことを感じた。



新千歳には昼過ぎに到着し、学生教員ともども7日間の密度の濃いスケジュールを有意義にこなして無事帰国することができた。

## 4. 情報化社会の日常・多彩な食文化

### 4.1. 情報・通信

グレートファイアウォール(金盾)という中国本土で実施されている包括的な情報管理システム構築プロジェクトがある。インターネットの検閲システムとなっており、一部の Web サービスが閲覧できないようになっている。グーグル、Gmail、グーグルマップのほか、LINE、facebook、インスタグラム、Twitter などの SNS はすべて使えず、YouTube も見るができない。使えるのは中国国内のサービスのみである。それでもなお、現在の中国は IT 大国・スマホ大国であることは実感できる。現地の人々がこのことで大きな不便を感じているようには見受けられなかった。前述したように、YouTube では知られているものの我々ですらまだ知らなかった、日本の音楽やダンスでさえ学生たちは良く知っていた。

中国ではグーグルの代わりに百度(Baidu)、グーグルマップの代わりに百度マップ、Twitter のかわりに Weibo(微博)、LINE の代わりに WeChat(微信)、タクシーを呼ぶときは Uber のかわりには DiDi(滴滴出行)<sup>46</sup>があり、DiDi のサービスはまだエリアは限られているものの日本にも進出してきている。WeChat はその名の通りチャットがメインの機能だが、QR コード決済機能サービスもあり、サービスの内容はまだ広がりつつある。

中国は監視社会であると言われる<sup>47</sup>。監視カメラは市内のいたるところについており、街角のあちこち、教室の中にも監視カメラはある。昆明ではかなりの交通量にもかかわらず、交差点に信号が無いところが多く、所によっては警官が交通整理をしているが、信号が無くても横断歩道を渡ろうとすると車が静かに止まってくれることが不思議だった。台湾では注意しないと横断歩道でも車優先の交通マナーでうっかりすると轢かれそうになるが、昆明市内ではそれがない。聞けば監視カメラがついてから、車のマナーが格段によくなったという。世界の多くの街で、人込みではスリに狙われないよう緊張するが、ここでは街を歩いていて犯罪の危険を感じることもなかった。これにも監視カメラが一役担っていることもまた確かなのである。

ちなみに道を歩いていると、後ろから電動バイクが音もなく迫っていることに気づかず、ヒヤッとすることはしばしばあった。バイクは電動化が進んでおり、環境対策も配慮されてきているようだ。

### 4.2. 電子決済

中国では日本以上に日常生活の多くの場面でスマホが欠かせない。高齢者ですらスマホを使わずには生活できないようすだ。すでに携帯端末による電子決済がメインの社会になっている。中国に国籍がないと銀行口座を作ることができないため、出国時点で中国国籍のない我々には WeChat Pay やアリペイ(Alipay/支付宝)のアカウントを持つことができなかった。ところが出国数日前に、アリペイは旅行者用の Tour pass で限定的ではあるが使用可能になった。他のサービスもこれに続く動きはあるようだ。

まだ街角の店やレストラン、地下鉄駅などでは現金を使うことができたが、クレジットカードはほとんど使えない。ホテルや大きなレストランでは使えるところもあるが、決済用端末の使い方を知らない店員が多い。必ずと言っていいほど、知っている先輩店員を探しに行き、なんとか決済を済ませるという状況だった。カード社会ではなく、欧米や日本なら街角のどこにでもある ATM もほとんどない。そ

ここに大きなレストランであっても、電子マネー以外は、カードばかりか現金すらも使えない店もあった。

中国においては、情報通信や電子決済に限らず、この10年あまりのテクノロジー分野での変化のスピードと、その生活への浸透には目を見張るものがある。欧米先進国とは異なるシステムが、中国国内ではすでに発展を遂げつつある。監視社会、情報統制社会と、マイナスな情報だけが独り歩きする日本国内での中国イメージだが、我々はそうしたバイアスからいったん離れ、中国が先端技術を使って模索する、新たなシステムのありのままを見てゆく必要があるのだろう。

### 4.3. 食文化

研修中の食事については、雲南、昆明の食文化として特色あるものを挙げておきたい。

多くの民族が暮らす雲南の料理は多彩である。一般には四川省の影響を受けて辛いものが多い。薬膳の材料を取り入れた料理もある。漢族の食文化も入っているので、レストランでは様々な料理が日本の中華料理店でもおなじみの回転テーブルで供される(図32)。肉・野菜・豆腐など食材も料理の種類も豊富である。雲南には海はないが、昆明には滇池で取れる魚がある。タイのトムヤムクンに似た酸味のある魚のスープもあった。雲南の名物料理としては、汽鍋といわれる専用の鍋に、水を入れずに食材を蒸すだけで作る「汽鍋鶏(チーコージー)」(図31)という鍋料理がある。

雲南は稲作地帯であることから、コメを使った料理が多い。民族村では赤米を竹筒に詰めて湯の中に並べ炊いたものを試食した。コメは粒が短いジャポニカ米がよく食べられている。特に、米粉を練って作った麺は、小麦粉を使った「麺」と区別して、「米线(米線)」と呼び、ラーメンのようにスープの中に米线が入ったものをよく食べたが、スープはやはり辛い。「過橋米线」(図33)は、大きな器に入った熱いスープに米线、鶏肉、野菜、うずら卵、豆腐皮(湯葉のような食材)を入れて食べる。これは「科学に備えて勉強中の夫にスープが冷めないように大きな器に入れて届け、そこに米线を入れて食べられるようにしたところ、夫は喜んで食べて合格した」と伝わる雲南料理である。

特筆すべきは、昆明に着いて初日に入った串焼き屋の屋台である。牛・豚・鶏肉・魚・野菜等、ありとあらゆる食材が串に刺して並べてあり、選んで頼むとそれを焼き鳥のように炭火で焼いてくれるのだが、中にカエル、アヒルの足、アヒルの舌など見慣れないものが並んでいて驚いた。学生たちは楽しそうに写真を撮りながら食べていた。官渡古鎮では「臭豆腐」に挑戦した団員に後で感想を聞いたが、相当抵抗のある匂いだったのか、味だったのか、いま一つ想像できずにいる。

珍しい食材としてもう一つ特徴的なものに、竹の中にいるという3cmほどの幼虫の料理で、皿に山



図31 汽鍋鶏



図32 雲南料理のレストラン





図 33 過橋米线



図 34 串焼き屋台

盛りにしたものが、しばしばレストランの料理の中に並んでいる。あまり癖のない味だった。

昆明では、その食の多彩さからも、この都市が多層的・多層的な文化をその内に抱えながら、外来の文化的要素を懐深く受容しつつ発展してきた、古くからの文明の十字路であったことが感じられた。

## 5. 結語

今回の海外研修で訪れることができたのは昆明市内のみだったが、雲南省の各大学との交流を通して、今後の相互理解や研究テーマに、極めて多くの点で契機や示唆を得られるものとなった。ガッチャーミ学生団の海外研修報告書のあとがきは、「滇池学院の日本語学科の生徒や教員を主として、様々な中国の方と触れ合い、体験し、お互いの文化を学び合った。このような小さな人と人との交流が、末永い繋がりを作っていくのだと感じました。」と結ばれている。

北京・上海・西安のような大都会に比べ、雲南省昆明市は日本人にとってまだまだ馴染みの薄い地である。しかし「春城」と呼ばれ通年過ごしやすい昆明市、豊かな自然と多様な民族文化に触れることのできる雲南は、中国人にとっては北海道と九州を足したような観光のデスティネーションである。雲南大学滇池学院周辺は、春節には観光客であふれるという一大リゾート地でもあった。現地を体験してみてもその関心が持たせいもあるかもしれないが、ウェブ上では最近とみに、ブログやSNS、YouTubeなどで雲南、昆明を取り上げた情報をしばしば目にするようになってきている。

昆明市は、中国国内から東南アジアへ、一帯一路へ、また空路で海外へとつながる交通ハブとして、現在新幹線・高速道路・空港などの交通インフラの建設が進み、地方の拠点都市として、国家主導の開発により発展を遂げつつある。国内各地の地方都市の拡大・開発と同時に、現在政府が推し進めているのは、雲南大学をはじめとする国家重点大学、国公立大学の教育内容の充実とともに、膨張する大学進学者数に対応して、雲南大学滇池学院にみられるように、独立学院等による高等教育の普及・拡大である。

広大な国土に点在する各地方都市では、一旦衰退した伝統文化の掘り起こしと保護・継承が具体的な形で施策化され、実施・推進されている。雲南省においては、少数民族文化の保護・継承、昆明市においては国家歴史名城への指定などがそれにあたる。そうした文化的資源の観光資源としての活用や、伝統的な美術・音楽・舞踊などを源とした、新たな芸術の創造活動も、民間だけでなく教育の場でも試みられている。今回の一つ一つの交流事業が示すように、各大学が国際交流に積極的であり、今後日中の地方対地方の大学間の学術・芸術・文化交流に様々な可能性が見いだせそうだ。

また中国の西南端に位置する都市の大学で、日本語と日本文化に関心を寄せる学士・修士・博士の優秀な学生たちがいることにも感銘を受けた。その彼らが日本に関心を持つきっかけとなったのが、漫画やアニメーションなどのサブカルチャーであるケースは非常に多く、これは中国に限らず世界中の国々で見られる傾向である。

しかしながら、国際交流基金の調査によると、中国国内では日本語学習者数は2012年の104万6千人から、2015年には95万3千人と、韓国・台湾などの東アジア諸国とともに減少傾向にある。日本語人材の受け入れについても、昆明市では現在日本語の高等教育を受けた人材の受け入れ先が無いということが雲南大学教授の話にもあった。これに対してタイ、ミャンマー、ベトナム、フィリピンなどの東南アジア諸国では増加傾向にある。その要因としては、これらの国々では進出日本企業からのニーズや、技能実習生制度の受け入れなどによる人材育成のための日本語教育のニーズが増加していることが挙げられる<sup>48</sup>。つまり、中国、韓国、台湾など、すでに経済発展を遂げた国々では日本語教育のニーズも減少傾向にあるということである。

しかしこれは、東アジア全体の発展という側面から見れば、必ずしも嘆くべきことばかりではないだろう。これまで欧米諸国の方ばかりを見てきた日本人の関心は、少しずつ他の発展した東アジア諸国にも向かい始めている。日本側からの交流の積極的な働きかけや相互理解への努力、関心の掘り起こしも今後大いに必要とされてくるだろう。また、学生たちにとっては、英語を介してのみではなく、他の東アジアの言語を用いたコミュニケーション能力も有用となってくるに違いない。

これまで本学では、北海道庁との連携により「農たび・北海道」などの活動を通して、北海道内諸地域の観光と地域振興に協力する取り組みを行ってきたが、北海道は海外、特に東アジアの旅行者にとって人気のある地域であり、海外観光客の受け入れに努力する地方も多い。まずは観光分野で高度な日本語運用能力、日本文化研究などを修得した人材のニーズが考えられるだろう。また、他の道内企業とのマッチングによって、道内企業の海外進出への足掛かりを作る可能性も期待できる。

中国の南西端、日本の北端という位置づけ、民族共生への努力など、雲南省と北海道には共通する課題も多い。今回の海外研修をきっかけとして、留学生の交換や、短期研修の受け入れ、ワークショップによる芸術交流など、相互の交流に発展してゆくことが期待される。

### 〈謝辞〉

この度の訪中では、雲南大学滇池学院院長の馬先生はじめ、日本語学院の高先生には大変お世話になりました。訪中の目的を達成できたのも、先生方のお蔭と深く感謝しております。この交流の成果を踏まえて、本学の国際交流事業が一層発展するよう微力を尽くす所存です。

(社会連携センター長 森雅人)

### 〈主要参考文献〉

- ・稲村務「中国紅河ハニ棚田の世界文化景観遺産登録からみる：「文化的景観」と「風景」」『地理歴史人類学論集=Journal of Geography, History, and Anthropology』(5), (2014/3), pp.23-69.
- ・萩野昌弘、李永祥編著『中国雲南省少数民族から見える多元的世界—国家のはざまを生きる民』明石書房(2017)
- ・梶谷懐、高口康太『幸福な監視国家・中国』NHK出版新書(2019)
- ・橋谷弘「改革開放以降の中国における地方都市の変貌—雲南省昆明市を事例として」『東京経大会誌』第293号、東京経済大学経済学会(2017), pp.93-119.
- ・田稼之「中国高等教育システムにおける重点大学の役割—教育サービスに注目して」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』63, (2019/3), pp.109-136.

- ・山村高淑, 藤木庸介, 張天新『世界遺産と地域振興: 中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社(2007)
- ・須藤護『雲南省ハニ族の生活誌—移住の歴史と自然・民族・共生』ミネルヴァ書房(2013)
- ・塚田誠之『民族表象のポリテクス—中国南部における人類学・歴史学的研究』風響社(2008)

## 〈写真撮影〉

雲南大学滇池学院, 島名毅, 堀じゅん子

- 1 橋谷弘「改革開放以降の中国における地方都市の変貌—雲南省昆明市を事例として」『東京経学会誌 経済学』293, pp. 93-120.
- 2 田稼之「中国高等教育システムにおける重点大学の役割—教育サービスに注目して」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』63, (2019/3), pp. 109-136.
- 3 日本政府観光局による過去 10 年間の訪日外客数の調査では, 中国は 2008 年, 韓国, 台湾に次ぐ世界で 3 番目の 1,000,416 人から, 2014 年に韓国・台湾を抜き, 2018 年の調査では 8,380,034 人と 1 位である。(日本政府観光局「国籍/目的別 訪日外客数(2004 年~2018 年)」 [https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor\\_trends/](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/))
- 4 堀じゅん子, 山下成治, 島名毅「グリーン・ツーリズム「農たび・北海道」の広報におけるデザインと社会連携の試み」『紀要』49, 札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部(2019/3), pp. 1-13.
- 5 「農家楽」については, 威智勇, 劉瑜, 盛茗, 品部義博「中国における持続可能な農山村振興の展開と農家楽: 恩施市芭蕉郷の取り組みから」『農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan』139 号, 日本農村生活研究会(2012, 12), pp. 20-29. / 鳳彬展「観光対象としての現代農村観光に関する研究—日中両国の農村観光を対象として」『観光学研究』東洋大学国際観光学部, (2018, 3), pp. 65-78.
- 6 荻野昌弘, 李永祥編著『中国雲南省少数民族から見える多元的世界—国家のはざまを生きる民』明石書房(2017)
- 7 ウポポイ(民族共生象徴空間)は, 2020 年 4 月, 北海道白老町ポロト湖畔にオープンするアイヌ文化復興・創造の拠点。アイヌの歴史, 文化等に関する理解促進と将来へ向けてアイヌ文化の継承及び新たなアイヌ文化の創造発展につなげるための拠点として構想されている。(ウポポイ HP [https://ainu-upopoy.jp/\[2020/1/31\]](https://ainu-upopoy.jp/[2020/1/31]))
- 8 中華人民共和国国務院が 1982 年に制定した, 歴史的価値の高い都市の文化遺産として保護する制度。昆明市は北京, 蘇州, 西安などととも, 国家第一批准歴史文化名城 24 都市の一つに指定されている。
- 9 2018 年末昆明市の居住人口は 685 万人で, 前年から 67,000 人増加。(昆明市人民政府 HP [http://www.km.gov.cn/c/2019-08-07/3082524.shtml\[2020-01-27\]](http://www.km.gov.cn/c/2019-08-07/3082524.shtml[2020-01-27]))2012 年から, 2018 年までの 6 年間で, 317,000 人増加。(「2018 年国民経済和社会发展統計広報」[2019/5/13])
- 10 橋谷弘「改革開放以降の中国における地方都市の変貌—雲南省昆明市を事例として」『東京経学会誌 経済学』293, pp. 093-120.
- 11 雲南大学滇池学院については, 学校案内パンフレット, 及び大学 HP による(雲南大学滇池学院『2019 雲南大学滇池学院—研究生和公務員の搖籃 创新创业的沃土』(2019), 雲南大学滇池学院就業信息网 [https://ynudcc.bysjy.com.cn/\[2020/1/27\]](https://ynudcc.bysjy.com.cn/[2020/1/27]))
- 12 前掲書 田稼之(2019), pp. 109-111.
- 13 中華人民共和国の重点大学と独立学院の関係については, 前掲書 田稼之(2019), pp. 114-115.
- 14 滇池学院馬杰学院長談(2019/11/11)
- 15 富樫慧凜央, 宮田雷蔵, 杉山もも, 若井日南子, 數寄詩織「2019 年度札幌大谷大学社会学部ガッチャーミ学生団中国研修報告書」
- 16 札幌大谷大学は仏教系の大学であるため, 式典の際に詠われるパーリ語の「三帰依文」から名付けたもの。
- 17 前掲書 橋谷弘(2017), pp. 109-110.
- 18 「新世界教育グループ 桜にはんご(新世界教育集団 櫻花国際日語)」は中国全土にフランチャイズを展開する中国最大の日本語学校。「日本語能力テスト」や「J.test 実用日本語検定」に対応して, 日本への留学希望者や, 日系企業就職希望者が数多く学んでいる。(桜にはんご HP [http://www.sakurajp.com.cn/hezuo/\[2020/1/31\]](http://www.sakurajp.com.cn/hezuo/[2020/1/31]))
- 19 東京ゲゲゲイというグループが, 水木プロ公認で原作のキャラクターダンスを踊る映像作品。ラップと原曲のアレンジ, ダンスなどが, ネット上で反響を呼んだ。
- 20 中華人民共和国における大規模検閲システム。「グレートファイアーウォール」の呼称は, アメリカのニュースサイ



- ト, NEWSMAX に書かれた記事に由来する。Charles R. Smith “The Great Firewall of China”, [https://www.newsmax.com/Pre-2008/The-Great-Firewall-China/2002/05/17/id/666750/\[2002/5/17\]](https://www.newsmax.com/Pre-2008/The-Great-Firewall-China/2002/05/17/id/666750/[2002/5/17]).
- 21 ウポポイ HP [https://ainu-upopoy.jp/\[2020/1/31\]](https://ainu-upopoy.jp/[2020/1/31])
  - 22 祭の際に各家庭でご馳走を作り, 道に沿ってお膳を並べて食事する行事。馬学院長によれば, 長い場合は3キロも続くと言う。
  - 23 1990年に行われた全国人口調査による民族識別工作によって正式に全国55の少数民族が確定し, 漢族を加えて合計56民族とされている。そのうち雲南省の少数民族は, イ族, タイ族, チワン族, プイ族, ペー族, ナシ族, リス族, ハニ族, ラフ族, ジノー族, ジンポー族, ワ族, プーラン族, アチャン族, ドーロン族, チベット族, プミ族, 回族, ミャオ族, ヤオ族, モンゴル族など25民族で[荻野昌弘, 2017, pp. 112-113.], 雲南民族村にはこれに漢民族を加えた26民族文化の展示施設がある。
  - 24 前掲書 荻野昌弘, 2017, pp. 129-130.
  - 25 雲南民族村の概要については, 中华人民共和国国务院新闻办公室 HP [https://www.scio.gov.cn/ztk/dtzt/31/12/2/Document/709284/709284.htm\(2020/1/25\)](https://www.scio.gov.cn/ztk/dtzt/31/12/2/Document/709284/709284.htm(2020/1/25))
  - 26 農林水産省 HP [https://www.maff.go.jp/j/agri\\_school/a\\_tanken/ine/01.html\(2020/1/25\)](https://www.maff.go.jp/j/agri_school/a_tanken/ine/01.html(2020/1/25))
  - 27 稲村務「中国紅河ハニ棚田の世界文化景観遺産登録からみる: 「文化的景観」と「風景」」『地理歴史人類学論集 = Journal of Geography, History, and Anthropology』(5), (2014/3), p. 49.
  - 28 山村高淑, 藤木庸介, 張天新『世界遺産と地域振興: 中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社(2007)では, 世界遺産に登録された麗江古城における歴史都市の観光開発について, 文化遺産の保護と活用をめぐる諸問題が検討されている。
  - 29 前掲書 橋谷弘(2017), pp. 107-108.
  - 30 林泉忠「知られざる『旅愁』の越境物語～戦前東アジア文化交流の一断章～」『戦争・架け橋・アイデンティティ～近代日本と東アジアの文化越境物語～: 東アジア日本研究者会議パネル報告(3)』[http://www.aisf.or.jp/sgra/active/news/2018/9988/\(2018/2/2\)](http://www.aisf.or.jp/sgra/active/news/2018/9988/(2018/2/2))
  - 31 タイ族の孔雀舞について, 長谷川清「民族表象としての「孔雀舞」—タイ族における「民族文化」の創作」『中国の民族表象—南部諸地域の人類学・歴史学的研究』風響社(2005), pp. 390-430.
  - 32 陳义「杨丽萍舞蹈创作的艺术特征」(Yi Chen, *Introduction to Yang Liping's Dance Creation Characteristic*), Education Research Frontier September 2017, Volume 7, Issue 3, Ivy Publisher, pp. 178-182.
  - 33 20世紀ヨーロッパ芸術とプリミティブアートの関係について, それが文化の収奪であるのか否か, MOMAでの展覧会オーガナイザー, W・ルービンと, 文化人類学者J・クリフォードの間でなされた論争。(ジェイムズ・クリフォード/太田好信ほか訳『文化の窮状—二十世紀の民族史, 文学, 芸術』人文書院, (2003), pp. 245-272.
  - 34 大鵬金翅鳥「ここ雲南の地では, 龍は洪水や嵐をもたらす悪いイメージとして取り扱われており, 大鵬金翅鳥とよばれる鳥によって退治されるのである。雲南省で龍が悪者扱いされ, 鳥に食べられる存在に凋落する背景には, 漢民族と少数民族の長い闘いの歴史が隠されていた。」(安田喜憲『龍の文明・太陽の文明』PHP研究所. Kindle版(2001), Kindleの位置 No.1072-1101).
  - 35 雲南省博物館 HP [http://www.ynmuseum.org/survey.html\(2020/1/25\)](http://www.ynmuseum.org/survey.html(2020/1/25))
  - 36 謝沫華著/長沼さやか訳「文化多様性の保護—雲南の探求と実践」『国立民族学博物館調査報告』巻109(2013/1)pp. 85-91.
  - 37 董琦「この館 この一点: 西南シルクロードの繁栄を物語る「牛虎銅案」」『人民中国』(2004/1)
  - 38 王亜新「中国の少数民族地域における言語教育政策と現状—雲南省と新疆ウイグル自治区を中心に」『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』(35), 2000, pp. 85-75.
  - 39 謝沫華/長沼さやか訳「文化多様性の保護—雲南の探求と実践」『国立民族学博物館調査報告 巻109』, pp. 85-91. (2013/1).
  - 40 同上
  - 41 同上
  - 42 云南网(来源:昆明日报)「官渡古镇领衔旅游业」[http://news.163.com/11/0106/06/6PMQ3BM600014AED.html\(2011/1/6\)](http://news.163.com/11/0106/06/6PMQ3BM600014AED.html(2011/1/6))
- 云南网「官渡古镇: 穿越唐宋元明清 体味纯正昆明生」[http://dy.163.com/v2/article/detail/F1VS476V0514R9NO.html\(2020/1/3\)](http://dy.163.com/v2/article/detail/F1VS476V0514R9NO.html(2020/1/3))

雲南旅遊資訊「官渡古鎮」<http://travelyunnan.org/yunnantour/kunming/scene/36.html>(2020/2/9)

43 前掲書 山村高淑(2007), p. 42.

44 橋谷弘「中国雲南の観光開発をめぐる研究動向」『東京経大会誌. 経済学』285, 東京経済大学(2015), pp. 289-304.

45 前掲 云南网(来源:昆明日报)「官渡古镇领衔旅游业」(2011/1/6)

46 滴滴出行(DiDi)は、中国本土のタクシー配車サービス用のモバイルアプリケーション。支払いプロバイダーと連携しており、ユーザーはスマホで支払うことができる。本社は北京で2012年に設立された。日本では2018年にDiDi モビリティジャパン株式会社が設立され、DiDiのサービスを開始した。

47 梶谷懐, 高口康太『幸福な監視国家・中国』NHK出版新書, NHK出版(2019), Kindleの位置 No.2773-2775.

48 国際交流基金 第8回日本語教育推進議員連盟総会用資料「海外の日本語教育の現状と課題」(2017)